

白石市文化財調査報告書第 42 集

鷹巣古墳群

平成 24 年 3 月

白石市教育委員会
(宮城県)

例　　言

1. 本報告は白石市教育委員会が実施した発掘調査のうち、未報告であったものについて、年次計画に従つて資料整理を進めたものである。郡山横穴墓群の現地踏査報告も併せて掲載した。なお、鷹巣33号墳は市計画道路建設に伴う発掘調査を実施しているが、写真資料が未発見のため、今回の報告から除外した。
2. 土層の色調表記については『新版標準土色帖』(小山・竹原、1996)を用いた。第1図は国土地理院2万5千分の1白石南部、白石、大河原、白石東南部を複製して使用した。その他は2千5百分の1の白石市都市計画図、GISを用いた。第32図2は渡辺伸行氏原図を基に一部改変し使用した。
3. 検出遺構の略号は以下の通りである。
SD：溝状造構　S：石
4. 報告書本文執筆は大栗行貴(福島県国見町教育委員会)が第4章第1節、第2節(2)、(3)、第3～5節、菊地芳朗(福島大学行政政策学類准教授)が第4章第2節(1)、まとめ、抄録は日下・大栗、その他を日下和寿、作図、トレス等は大栗、岡部とき子が担当した。
5. 発掘調査の実施、報告書作成にあたっては宮城県教育厅文化財保護課、土筆舎をはじめとする次の機関・個人から御協力、御指導をいただいた(敬称略)。

土師器、須恵器	石本　弘(白石市文化財保護委員)、菅原洋夫(福島県文化財センター)
古墳、埴輪	佐藤敏幸(東松島市教育委員会)
	土筆舎、藤沢　敦(東北大学埋蔵文化財調査室)
	渡辺伸行(神戸市埋蔵文化財センター)
	辻川哲朗(滋賀県文化財協会)
陶器	東影　悠(奈良県立橿原考古学研究所)
写真撮影	佐藤　洋(仙台市教育委員会)
その他	君島武史(北上市立埋蔵文化財センター)
	各地権者、延命寺、事業主、福島大学行政政策学類、白石高校、青野慎彦
	長谷川基男、遠藤盛勝、山家貞二
6. 資料整理、報告書刊行に指導いただいた故中橋彰吾白石市文化財保護委員長に哀悼の意を表す。
7. 本事業の記録及び出土品は、亀田1号墳出土資料を除き、白石市教育委員会生涯学習課が保管しており、依頼に応じて公開、貸出を行っている。

調　　査　要　項

遺跡名称　鷹巣古墳群(宮城県遺跡登録番号 02005) 26、27号墳
遺跡所在地　宮城県白石市鷹巣堂ノ入山2-3(現在は分筆され、2-11、2-12、2-13)
調査理由　範囲内容確認
調査主体　白石市教育委員会
調査担当　白石市教育委員会社会教育課 津田優佳
調査協力　宮城県教育厅文化財保護課 後藤秀一、佐藤則之、柳澤和明、佐藤憲幸
調査期間　平成16年1月26日～2月3日
調査面積　1,323.8m²(発掘面積 78m²)

遺跡名称　鷹巣古墳群(宮城県遺跡登録番号 02005) 28号墳
遺跡所在地　宮城県白石市鷹巣堂ノ入山2-14
調査理由　範囲内容確認

調査主体 白石市教育委員会
調査担当 白石市教育委員会社会教育課 津田優佳（主担当）、日下和寿、遠藤修身
調査協力 宮城県教育庁文化財保護課 菊地逸夫
調査期間 平成17年7月19日～8月22日（発掘調査）
平成19年3月25日（埋め戻し）
調査面積 669.3m²（発掘面積23m²）

遺跡名称 鷹巣古墳群（宮城県遺跡登録番号02005）29号墳

遺跡所在地 宮城県白石市鷹巣字堂ノ入山2-6ほか

調査理由 範囲内容確認

調査主体 白石市教育委員会

調査担当 白石市教育委員会社会教育課 津田優佳（主担当）、相原宏一

調査協力 宮城県教育庁文化財保護課 後藤秀一、佐藤則之、佐藤憲幸

調査期間 平成16年7月5日～7月14日（発掘調査）

平成20年6月9日～平成21年4月14日（埋め戻し）

調査面積 1,627m²（発掘面積97m²）

遺跡名称 鷹巣古墳群（宮城県遺跡登録番号02005）30号墳

遺跡所在地 宮城県白石市郡山字虎子沢山2-5、2-26

調査理由 範囲内容確認

調査主体 白石市教育委員会

調査担当 白石市教育委員会社会教育課 日下和寿（主担当）、津田優佳、遠藤修身

調査協力 宮城県教育庁文化財保護課 菊地逸夫

調査期間 平成17年8月9日～12月5日（発掘調査）

平成19年1月18日（埋め戻し）

調査面積 2,282m²（発掘面積483m²）

第1章 位置と環境

宮城県白石市は宮城県南部に位置する。西には蔵王連峰、東には阿武隈山地があり、盆地のほぼ中央を白石川が流れ、下流で阿武隈川と合流し、太平洋に繋がっている。

鷹巣古墳群は白石市中心部の東に接する標高100mほどの丘陵上に立地している。市役所から東へ1.6kmの位置にある。古墳群は、丘陵の頂部にいくつかのグループを形成して立地していた。

周囲には弥生時代以降の遺跡が多く所在する。和尚堂遺跡では弥生中期の菅玉を作う土坑墓2基、旧河道、石庖丁、大型蛤刃石斧、板状石器等が出土した（日下、櫻井ほか2009）。

古墳時代前期、塙釜式期の竪穴住居跡は梅田遺跡で確認されている（遠藤、清野1984）。中期、南小泉式期の土器は和尚堂遺跡において、ややまとまって出土している。石製模造品も発見されている。



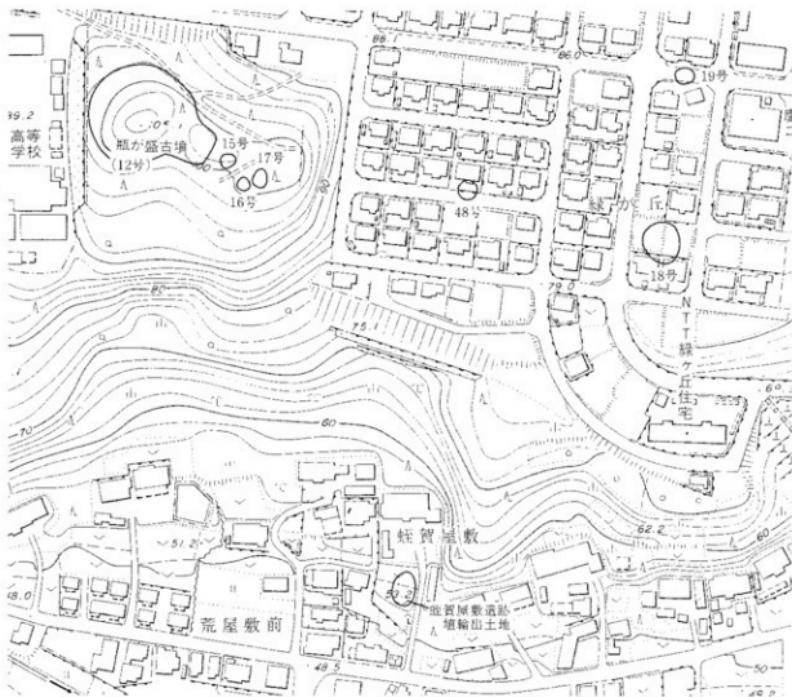
番号	遺跡名	種別	時代	番号	遺跡名	種別	時代
1	鹿山古墳群	前方後円墳、円墳	古墳、古代	12	羅音崎遺跡	集落	古墳後~平安
2	使子ヶ墓古墳	円墳	古墳	13	白石城跡	城館	近世
3	上醍沢古墳	円墳	古墳時代後期	14	瓦山遺跡	散布地、墓葬、城館	畿文中、古代、中世
4	郡山横穴墓群	横穴墓群	古墳時代後期、奈良	15	輕賀原徹差跡	散布地	古墳、中世
5	郡山寺入西横穴墓群	横穴墓群	古墳時代後期、奈良	16	谷津川遺跡	散布地	畿文、古代、中世
6	郡山寺入東横穴墓群	横穴墓群	古墳時代後期、奈良	17	白石桑里剣削定地	水田跡	古代、中世
7	郡山金屋横穴墓群	横穴墓群	古墳時代後期、奈良	18	相馬堂遺跡	散布地	畿文後、弥生、古代、中世
8	黒巻横穴墓群	横穴墓群	古墳時代後期、奈良	19	梅田遺跡	粟場	弥生、古墳
	淀川内遺跡	散布地	弥生~平安	20	草ノ古墳	円墳	古墳、第3石柱
10	柿井内遺跡	散布地	奈良、平安	21	志在家遺跡	散布地	畿文、古墳、古代、中世
11	大相遺跡	散布地、官衙	弥生~中世	22	塔ノ古墳	円墳	古墳時代

第1図 遺跡地図

第1表 麥塚古墳群記載名対応表

番号	片倉報告 1941	1941年の状況	報告書 1964、 地図カード 1963 等	1964年の状況	報告書 1972	市史 1976	2011年の現状	備考
1 第1号	未報	第1号	未	掘	記載対象外	1号	1965年発掘後、消滅	
2 第2号	未報	第2号	未	滅	。	2号	消滅	
3 未命名、 第2号の東側	消滅していた	第13号	前	滅	未命名、 第2号の東側	消滅		
4 第3号	未報	第3号	未	掘	。	3号	1966年発掘後、消滅	
5 記載なし	不明	第13号	前	滅	記載なし	消滅		
6 記載なし	不明	第44号	前	滅	記載なし	消滅		
7 第4号	未報	第4号	未	掘	記載対象外	4号	1966年発掘後、消滅	
8 第5号、 横穴式石室	簡便	第5号	消	滅	。	5号	消滅	
9 第6号	発掘	第6号	消	滅	。	6号	消滅	
10 第7号	未報	第7号	未	掘	。	7号	1966年発掘後、消滅	
11 第8号、 横穴式石室	発掘	第8号	消	滅	。	8号	消滅	片倉 1931 の第3墳
12 第9号	未報	第9号	消	滅	。	9号	消滅	片倉 1931 の第2墳
13 第10号、 横穴式石室	発掘	第10号	消	滅	。	10号	消滅	
14 第11号、 横穴式石室	発掘	第11号	消	滅	。	11号	消滅	片倉 1931 の 第4墳か
15 第12号	未報	第12号	未	掘	12号	12号	保存、県史跡	
16 第13号	未報	第13号	未	掘	記載対象外	13号	1965年発掘後、消滅	掘り盡し
17 第14号	未報	第14号	消	滅	。	14号	消滅	
18 計算に含めず	不明	第15号	人	堀	15号	15号	保存、県史跡	
19 計算に含めず	不明	第16号	破	壊	16号	16号	保存、県史跡	
20 記載なし	不明	第17号	未	掘	17号	17号	保存、県史跡	前方後円墳
21 第18号	未報	第18号	消	滅	記載なし	記載なし	記載なし	昭和初期には消滅
22 第19号	未報	第19号	破	壊	19号	19号	記載なし	記載なし
23 第20号	未報	第20号	未	掘	20号	20号	保存、県史跡	保存、県史跡
24 第21号	未報	第21号	未	掘	21号	21号	保存、県史跡	保存、県史跡
25 第22号	未報	第22号	未	掘	22号	22号	保存、県史跡	保存、県史跡
31 第23号	未報	第23号	洞	滅	23号	23号	確認できず	
32 第24号	未報	第24号	破	壊	24号	24号	保存、県史跡	
33 第25号	未報	第25号	未	掘	25号	25号	保存、県史跡	1982年範囲確認調査
34 記載なし	不明	第50号	洞	滅	50号	50号	確認できず	
35 記載なし	不明	第51号	消	滅	記載なし	記載なし	確認できず	
36 第26号	未報	第26号	未	掘	26号	26号	2001年築造調査、 一部破壊	
37 第27号	未報	第27号	未	掘	27号	27号	2004年確認調査、 一部破壊	
38 第28号	未報	第28号	破	壊	28号	28号	2005年確認調査、 一部破壊	
39 第29号	未報	第29号	未	掘	29号	29号	2004年築造調査、 一部破壊	
40 第30号	未報	第30号	破	壊	30号	30号	2005年確認調査、 一部破壊	
41 第31号	未報	第31号	破	壊	31号	31号	確認できず	
42 第32号	未報	第32号	破	壊	32号	32号	確認できず	
43 第33号	未報	第33号	未	掘	33号	33号	1996年発掘後、消滅	
44 第34号	未報	第34号	未	掘	34号	34号	一部破壊、残存	
45 第35号	所在不明示されず	第35号	洞	滅	記載なし	記載なし	小明	
46 第36号	未報	第36号	破	壊	36号	36号	理存	経塚山古墳
47 第37号	未報	第37号	破	壊	37号	37号	理存	
48 第38号	未報	第38号	破	壊	38号	38号	理存	
49 第39号	未報	第39号	破	壊	39号	39号	理存	
50 第40号	未報	第40号	破	壊	40号	40号	理存、一部破壊	
51 第41号	未報	第41号	破	壊	41号	41号	1991年一部未報、 現存	鏡ヶヶ丘古墳

第24号から西南 20m で扇手刀出土
第34号から東南 50m で扇手刀出土



第2図 古墳位置図1 (S=1/2,500)

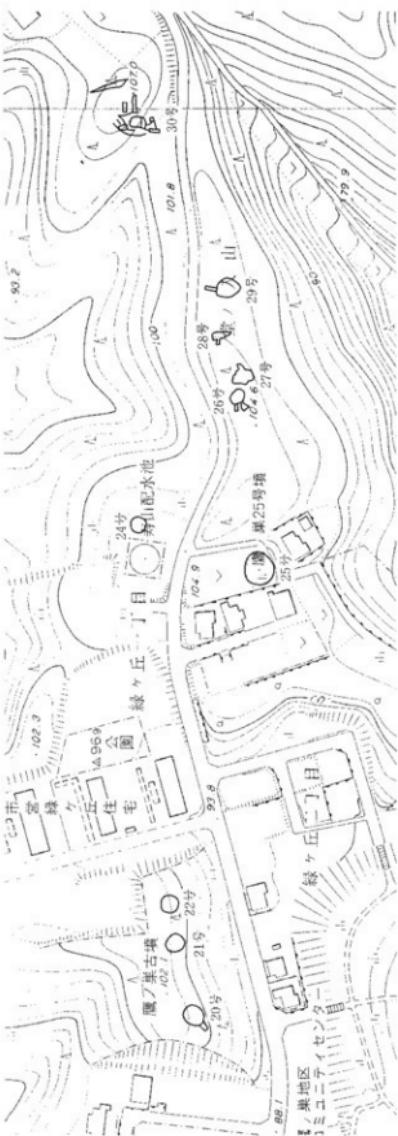
第2章 鷹巣古墳群のこれまでの経緯

鷹巣古墳群は、戦前は乱掘、戦後は住宅用地造成によって多数の古墳が失われてきた。ここでは、これまでの調査、保存の流れ、関連事項を記すこととしたい。

この古墳群に関する調査報告論文には、次のものがある。片倉報告（1931、1941）、現状報告（片倉、遠藤ほか 1964）、埋蔵文化財包蔵地調査カード（片倉、高子ほか 1963）、発掘報告書（宮城県教育委員会 1967、志間 1972、日下ほか 1998、2009）、市史考古資料篇（片倉ほか 1976）である。なお、片倉報告（1941）は個別の古墳ではなく、古墳群全体を調査、考察した早期の事例として貴重である（藤沢 2001）。これらの片倉報告等を基に、各古墳の年代毎の保存状況をまとめたのが、第1表である。

平成 23 年（2011）現在においては、消滅したもの 20 基、所在が確認できないもの 9 基、一部が破壊されたものも含め保存 21 基、所在地不明 1 基となっている。

概ね昭和初期までは、古墳群の保存は良好であった。一部で乱掘があったものの、風致地区に指定



第3図 古墳位置図2 (S=1/2,500)

され、古墳を含む景観が保存されていた。しかし、戦後、住宅団地造成により、古墳群は西にあるものから順次、姿を消していった。

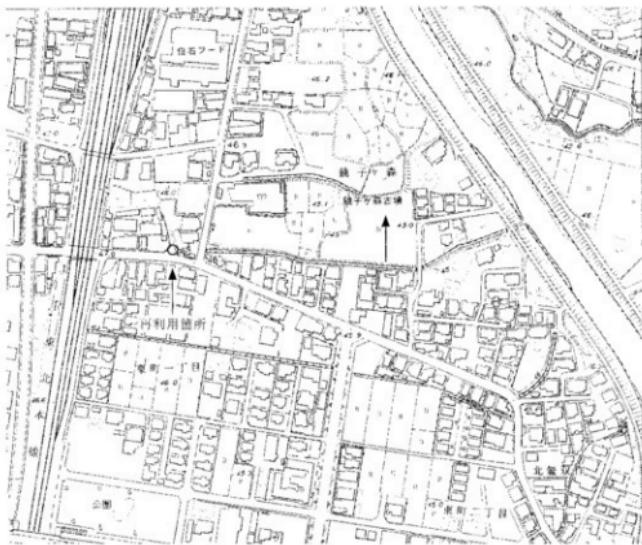
住宅団地造成に伴い、昭和40、41年の調査では、1、13、3、4、7号墳が発掘調査された。これらのみが発掘調査対象となった理由は、片倉報告（1941）において「未掘」となっていることであったと思われる。

片倉報告の記載で注意しなければならないのは、乱掘盗掘も含め、古墳が暴かれて、石室がむき出しになった場合でも「発掘」としている点である。学術的な発掘調査を経なくとも、古墳が掘られた場合には「発掘」としている。片倉は、この荒らされた古墳も観察し、埴丘規模、石室の特徴を調査している。また、聴き取り調査によって、かつて古墳が所在していた箇所も記載している。

昭和40年(1965)4月5日から8日に第一次調査が行われ、1号墳が発掘された。第2次調査は13号墳が対象で同年10月21日から26日に調査されている(宮城県教育委員会1967)。第3次調査は、昭和41年(1966)7月22日から3、4、7号墳を対象に発掘調査が実施されているが、未報告である。

第4次調査は昭和46年(1971)の18、19、48号墳が対象であった(志賀1972)。この調査では、18号墳からまとまった埴輪の出土があった。報告書には記載がないものの、中世陶器等の出土もあった(第24図)。

昭和46年に一部が宮城県県指定史跡となり、早速、指定面積11,830m²のうち、



第4図 銚子ヶ盛古墳の石室蓋石の再利用箇所 (S=1/4,000)

5筆、6,601.43m²が公有化された。総事業費4,393千円、うち県補助金2,196千円、白石市負担2,197千円であった。これにより斂ヶ盛古墳（12号墳）周辺が保存されることとなった。

昭和 57 年 11 月には、25 号墳において、範囲確認調査、測量が行われている（下ほか 2009）。この調査時に遺物が表採されており、第 23 図 1、2 に図示した。平成 7 年には 33 号墳が都市計画道路建設に伴い全面発掘調査が実施されている。銚子ヶ盛古墳の一部も都市計画道路建設に伴い、発掘調査が行われている（下ほか 1998）。

鷹巣古墳群の石棺が発掘調査後、移築され、平成11年（1999）8月5日頃までは、白石第一小学校に保管されていた。当時の写真が残されており、「白石市史」考古資料篇に掲載された写真と対比すると、3号墳と考えられるものである（写真図版4-4）。これは校舎の大規模改修工事に伴い、文化財係へ移管され、しばらくの間、旧大鷹沢小学校体育館脇で野ざらしにされていたが、現在は資料整理室において、分解して保管されている。

また、長らくその所在が不明となっていた18号墳出土の埴輪は、平成22年6月になって所在が判明した。白石高校と白石女子高が平成22年4月に統合され、新しい白石高校が誕生した。その後、旧白石高校の校舎内の物品整理が行われたが、手違いから、郷土研究部収集品が、一日、廃棄寸前となつた。作業に関わっていた卒業生の機転が働き、資料は、一時的に市教育委員会で保管することになった。急速、運び出された資料の中に18号墳埴輪が大量に含まれていた。おそらく、昭和46年の発掘時に、郷土研究部員が調査に参加し、後の資料整理、注記も研究部が埴輪を担当し、発掘調査報告書刊行後に

も高校内で保管したため、学校内に伝わったものと考えられる。しかしながら、青木遺跡の壺、樂師堂遺跡における昭和 58 年頃の無断発掘資料の所在は現在でも不明である。逆に『宮城県史』34 卷に掲載されている岩版、石棒、弥陀内遺跡石包丁は存在が確認された。後に、岩石資料等と共に、白石高校と市教育長間で、資料寄託の合意がなされた。

また、市史考古資料編 20 頁に記載された銚子ヶ盛古墳石室の蓋石は一つのみ現存する(第4図)。現在、水路を跨ぐ橋に使用しているが、橋幅が拡張り、水路の高さも低く、水路にもぐって、どの石であるのか確認することは困難であった(写真図版 4-5)。

市史考古資料編 19 ~ 20 頁に記載された鷹巣觀音堂の絵馬は平成 22 年 10 月末に現物を確認した。この絵馬は、もともと觀音堂に保管されていた。しかし、宮城県沖地震の時、縁ヶ丘団地の土砂崩れに巻き込まれ御堂は倒壊した。しかし、不思議なことに絵馬だけは災難から逃れ、無事であったという。現在、観福寺において保管している。

絵馬全体は風化しており、墨書、絵の具が施された箇所がかろうじて、文字、絵を判読することができる状態であった(写真図版 4-6 ~ 8)。横 76.5cm、縦 58.4cm。市史考古篇に記載されている文字等が確認されたが、一部で異なる読みができる箇所もあった。享保十五庚戌年(1730)に奉納されたものである。虫食いはないようである。

大規模な住宅団地造成による発掘は昭和 46 年(1971)の 18、19、48 号墳が最後になると見られていた。それは、周辺の標高の低い箇所に住宅地が造成され始めたこと、人口の増加がみられないことが理由であった。

しかしながら、鷹巣古墳群の受難の時代は続いた。平成時代に入り、小規模な宅地造成は続き、鷹巣古墳群が所在する丘陵も蚕食される状況にあった。

平成 5 年(1993)4 月 26 日、住民から鷹巣字堂ノ入山 2-3、2-4 において、重機が入り造成工事を行っているとの連絡があった。当日午後、市企画財政課職員が現地確認を行った。M 社、T 社が、当該箇所を住宅地として分譲販売(2,750m²)する計画が明らかになった。しかし、市開発指導要綱に基づく協議すらされておらず、文化財保護法、森林法関係の手続きもなされていない状況であった。当該箇所には 26 ~ 28 号墳が所在し、墳丘はこの時、削平されている。これらの業者は、市各課からの指摘、指導にも関わらず、不誠実な対応に終始した。

平成 5 年 8 月 30 日には、市教委の清野、日下(裕)、木須により 26 号墳石室平面図が作成されている。

平成 15 年(2003)11 月、今度は、この土地が競売にかかり、古墳の取り扱いについて、個人事業主から照会があった。この土地を第三者に転売するため、事前に調査を行うように市教委に依頼があった。同 12 月 24 日、この個人事業主による当該箇所の正式購入が決定する。前回の工事によって、古墳の位置が不明確となっていたことから、確認調査を平成 16 年(2004)年 1 ~ 2 月に実施した。

調査の結果、26、27 号墳の位置範囲が確定した。28 号墳については、他の調査との兼ね合いもあり、後日、実施することになった。しかし、当該地の宅地分譲に係る造成工事は市開発指導要綱に基づく協議がなされていないことが判明し、再々、この事業主に協議を求めたが、工事は続行された。また、26、27 号墳は調査終了後にブルーシートを掛け、埋め戻しを行ったため、その後、地表に亀裂が入り、崩壊の可能性が生じ、ブルーシートを除去する作業を行っている。その際、石室の一部を損壊した可

能性が高い。

鷹巣字堂ノ入山 2-6、2-7、2-8 に所在する 29 号墳を含む土地もまた、競売にかけられ、第三者の手に渡り、宅地造成されることになった。平成 15 年 2 月、先とは別の個人事業主が造成工事を建設会社に依頼したが、確認調査の実施を待たず、古墳の一部を破壊してしまった。これを受け、平成 16 年 7 月に確認調査を実施し、経費の一部は個人事業主が負担した。

平成 8 年（1996）9 月 27 日、郡山字虎子沢山 2-5、2-26 地内の 30 号墳を含む箇所で、樹木の伐採が実施されているとの情報が市教育委員会にもたらされた。その日の午後、市教委担当者によって現地確認及び写真撮影が行われた。すぐに、事業主であり伐採を行っていた市内の建設会社に連絡をとり、古墳である旨を伝達し、事業を継続する場合は、県教委へ文化財保護法に基づく諸手続が必要なことを説明した。建設会社では、この件を了解し、これ以上の工事は行わないことで一応の決着をみた。

しかしながら、平成 12 年（2000）11 月 6 日に 30 号墳が既に削平されているとの連絡が市教委にもたらされた。平成 8 年と同じ市内建設業者の重機が稼働していた。会社側によれば、下水道工事の残土置き場として、この土地を使用しており、残土をならす際に、誤って古墳も削平したという説明であった。30 号墳があった箇所では、石が散乱し、石室の一部が破壊された可能性が高かった。

こうした結果を受け、諸般の事情で、延び延びになり、古墳の残存状況確認調査が実施されたのは、平成 17 年（2005）8 月になってからであった。調査経費の一部は、この建設会社が負担した。その結果、古墳の南西部分、墳丘上部が削平されているものの、周溝、一部破壊された石室が確認された。その後、この建設業者と市教育長とで古墳保存に関する覚書を交わした。また、詳細は不明であるが、34 号墳の一部も無届工事により破壊されている。

これらのことから、明らかなことは、第一に、不誠実な事業主による法を無視した工事によって古墳群が破壊されたことである。しかしながら、地元教育委員会文化財担当の不作為、怠慢も問題である。事業主からの届け出がなければ、保護調整を講じないという消極さである。各種開発事業にさらされた箇所にある古墳であれば、隨時パトロールを行うこと、各地権者に古墳の所在を周知する、埋蔵文化財標柱を設置するなどの積極的な対応が必要であった。

これらが重なり、鷹巣古墳群の保護が出来なかつたのである。昭和 46 年に一部が宮城県指定史跡となっているが、その後、追加指定を行い、保護施策を進めるべきであった。十分な時間はあったはずである。

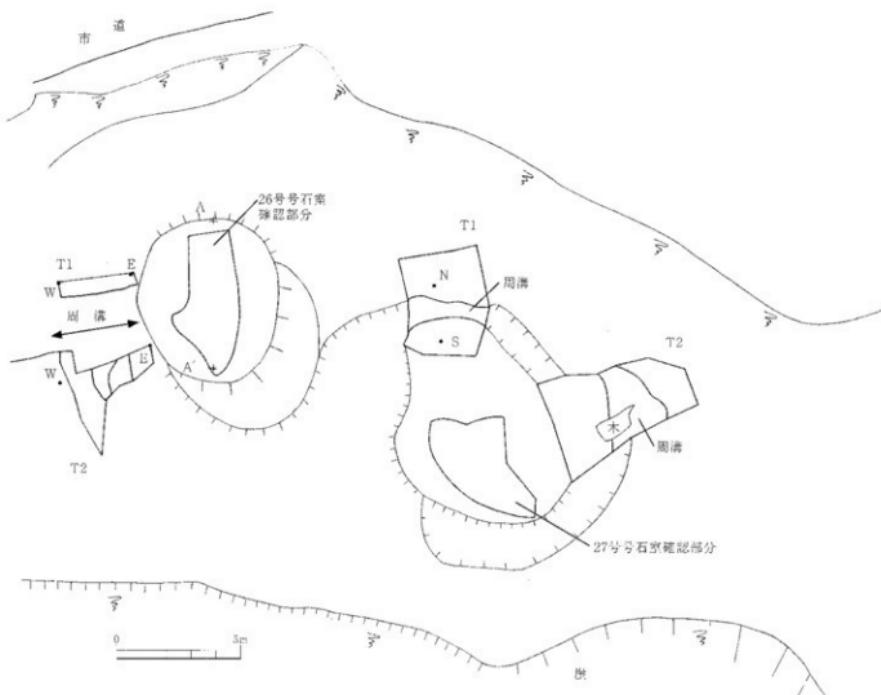
第3章 発見された遺構と遺物

ここでは、発掘調査の結果を各古墳毎に報告する。既発掘調査資料も含めた関連資料は第3及び4章に掲載した。古墳の呼称は、白石市史考古資料篇（片倉ほか 1976）に基づいた。何れの古墳も横穴式石室であることから、7世紀代のものと考えられる。

第1節 26号墳、27号墳

今回報告する中で、最も西側に所在する円墳である。西から26号墳、27号墳となり、周溝がぶつかり合う可能性があるほど、隣接している。何れも南に開口する石室と考えられる。

26号墳は石室と周溝の一部を確認した。周溝上面幅はトレンチ調査箇所で1.4～2mであり、底面付近では0.3m、深さは0.5mほどを確認した。周溝外郭直徑は10m前後、高さは約1mと推定される。墳丘は長楕円形を呈しているようである。石室を含む墳丘上面は東西6m、南北6.6m、墳丘の斜面上部側は明確に捉えられなかつたものの、南側では、弧状に最大幅2.5mほどの墳丘の高まりが確認され



第5図 26、27号墳 確認調査図



第6図 26号墳 石室確認状況（2004年1月）

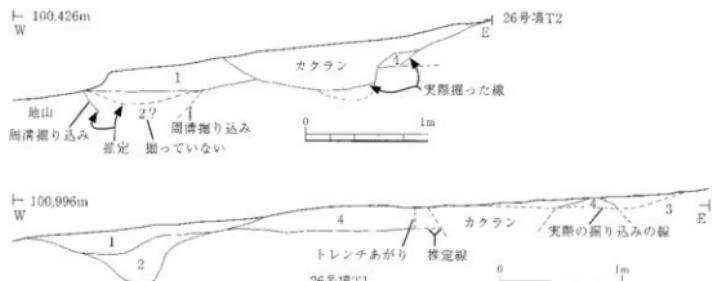


第7図 26号墳 石室確認状況（1993年8月）

た。石室は横穴式と判断され、2004年段階では東西3m、南北5.9mの長方形の範囲に石室の石が分布していた。天井石は無くなっていると思われる。石の大きさは0.3~0.6mである。1993年段階の確認状況図も残されており、2004年のものと比較すると、長年放置された結果、石の移動が見て取れるようになっている。石室主軸はN-6°-Wである。

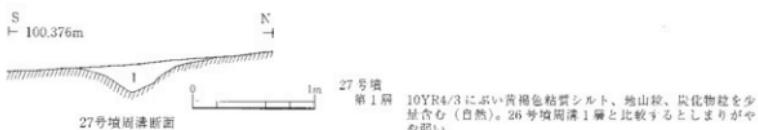


第8図 27号墳 石室確認状況



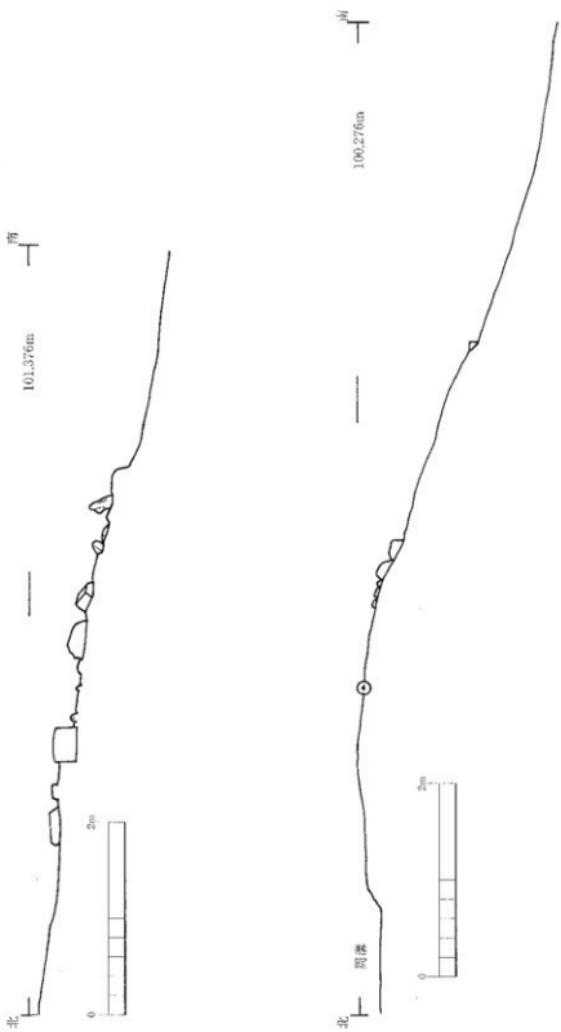
- 26号
第1層 10YR4/3にぶい黄褐色粘質シルト、マンガン、炭化物、地山粒を含む
第2層 10YRS/4にぶい黄褐色粘質シルト、マンガンを多量に含む、炭化物、地山ブロックを含む
第3層 10YRS/4にぶい黄褐色粘質シルト、炭化物、小殻、褐色(4層と同じ)シルトを粒状に少量含む
第4層 10YR4/4褐色粘質シルト、マンガンを多量に含む、炭化物を少量含む

第1~4層は余作的にしまっている。第1、2層は周溝の自然堆積土、第3層は墳丘盛り土、第4層、盛り土前に整地層?が旧表土。



第9図 26、27号墳 セクション図

第10図 26号墳 墓丘エレベーション(上)、27号墳 墓丘エレベーション(下)

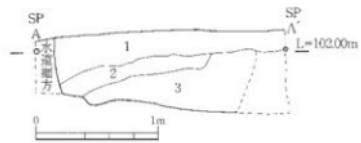




第11図 28号墳 確認調査図

27号墳は石室上面と周溝の一部を確認した。周溝幅にはバラツキがあり、1~25mである。概して斜面上側、すなわち北側の幅が狭く、南側すなわち斜面下側の幅が広い。深さは0.25mである。墳丘は石室を含む墳丘上面は東西7m、南北7mほどである。高さは約1.3mと考えられる。周溝外郭直径は12~13mと推定される。墳丘は長楕円形を呈していると思われる。石室は横穴式と考えられる。石室の石は東西5.5m、南北3.5mに分布していた。破壊は受けているものの、石室下部は残存していると思われる。石室主軸はN-43°-Wである。

エレベーション図は掲載したもの、その測点ポイントが平面図に記されていなかったため、平面図には図示していない。



28号
第1層 10YR4/6 黄褐色粘土、粗砂を含む、粘性強、しまり強を主体として直徑5~50mmの灰色粒・赤褐色粒等を含む
第2層 10YR4/2 黄褐色粘土、粘性強、しまり強
第3層 10YR5/6 黄褐色粘土、粘性強、しまり強

第12図 28号墳 深掘区セクション

第2節 28号墳

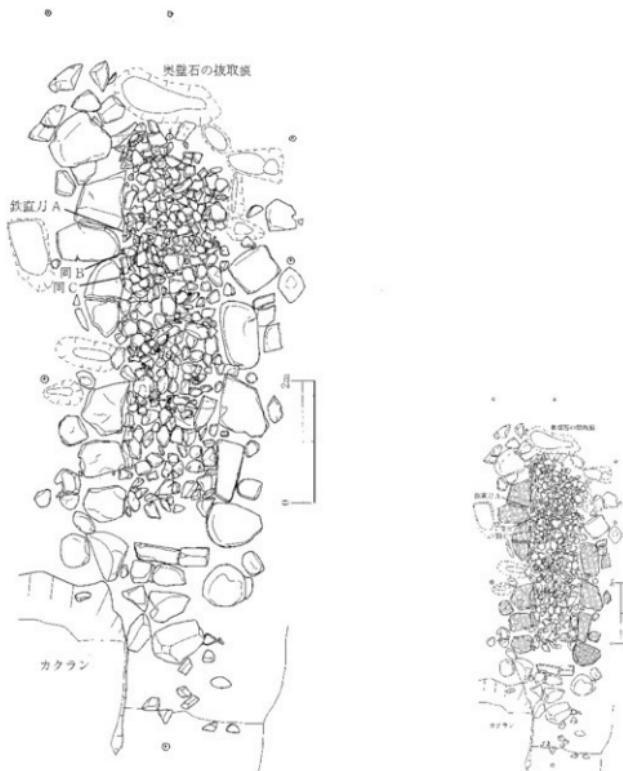
28号墳の墳丘は既に大きく削平されており、石室底面が残存しているに過ぎなかった。古墳範囲の一部は東側の民家下に延びている。古墳の規模は掴めなかった。片倉報告(片倉ほか1964)では、東西7m、南北7m、高さ1.5mの円墳と報告され、既に一部破壊を受けている。横穴式で無袖式石室と考えられる。石室の北側には奥壁の抜き取り痕があり、

長さ0.9m、厚さ0.35mであった。石は南北5.5m、東西21mの範囲に分布していた。石室は、南へ開口する形である。石室上軸はN-6°-Wである。渾同道部にあたる箇所は破壊されていた。閉塞石の可能性がある石がいくつか発見されている。樋石は東西方向に見つかっている。樋石は幅0.15mの長方形の石が用いられている。玄室の両側の壁には丸みを帯びた0.3~0.6m長の石が用いられている。

これらは一段しか残存していなかった。内部の規模は3.5m、幅0.75～0.85mである。底面の敷石には、最長でも0.2m大の石、最も多いのは、0.1m大の石が密に敷かれている。奥壁に接する左右隅は内部に若干張り出す形となっている。敷石の南端と奥壁寄りでは、約0.2mのレベル差が確認できる。奥壁に向かって左側に鉄刀があり、3つに割れて発見された。残存状況では長さ59cmであった。出土した鉄刀のうち、3a、3bのみが刃を上に、その他は刃を下にして出土している。切先は開口部を向いていた。これとは別の鉄刀の切先と考えられるものがあることから、2振以上が納められたものと推定される。これらとは別の鉄板状のものが出土している。

そのほか、須恵器底部片も発見されている。石室脇に細いトレンチを東西に入れたが、明確な墳丘積土は確認されなかった。周溝の有無も不明である。

28号墳の南側に造成された法面から土師器、須恵器小片が発見されており、破壊された26～28号墳に伴うものと推定された。



第13図 28号墳 石室底面

第14図 原位置を留める石

第3節 29号墳

この古墳は円墳で東西8m、南北9.7mの規模であるが、西側はゴミ穴が発見され、削平を受けていることが判明した。そのため、等高線も歪んでいる。墳丘の残存高は0.9～1.5mである。自然の高まりを利用して墳丘が作られているが、積み土が石室周辺では東西5.1m、南北6.5mの範囲で確認された。石室の掘り方は確認されていない。北側にトレンチを設定したが、周溝は確認されなかった。残存する頂部の標高は103.05mである。横穴式石室は南に開口し、東西2.5m、南北4.4mの範囲で石が確認された。石室主軸はN-8°-Wである。一部が平坦な面がある石も確認されている。しかし、平坦な面が節理面である可能性も多い。明確な加工痕がないことから、節理面としておく。石は0.3～0.4mの大のものが多い。石室内部の規模は東西0.8m、南北3.8mと推定される。南端の0.1m大の石は石室の敷石と考えられている。この敷石のレベルから、奥壁の残存高は1.1m程度と思われる。出土遺物は少なく、土師器1点のみであった。

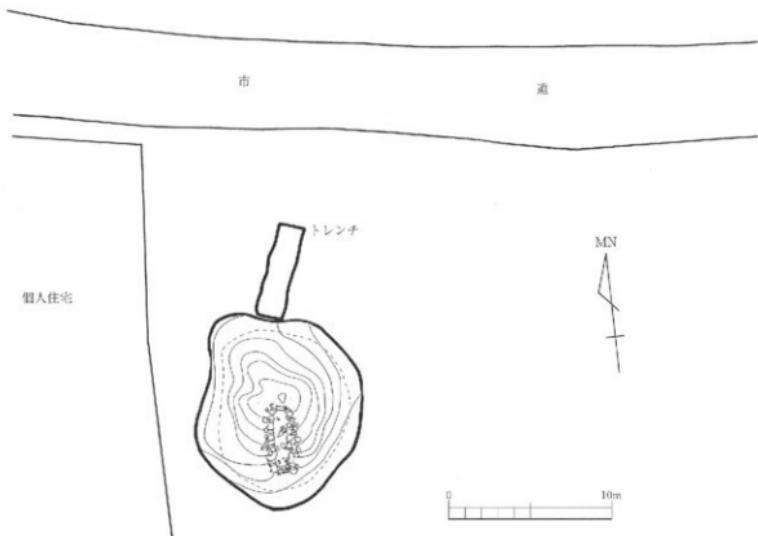
第4節 30号墳

30号墳は、片倉報告（片倉ほか1964）において直径16m、高さ3mと記載されている円墳である。現状で墳丘西側は大きく削平されているが、石室の破壊は一部であった。

調査では、石室上面と周溝を確認した。墳丘裾部での直径は14mである。周溝はT2、4、5、7、8で確認されているが、北東部の標高の高い箇所（T3）では、途切れるようである。幅はT2、5において2mほどであるが、T4では、明確に捉えられず、周溝底面の幅0.55mを確認しただけである。T4において、推定の周溝幅は約5mとなる。T5、7から判断すると深さは0.5mと考えられる。古墳南側も削平を受けており、詳細は不明である。遺物は若干出土した。T4の表土からは、合子？（香合）、時期窪地不明、青色釉、1点が発見されている。

石室の石は東西3.2m、南北5.2mの長方形に分布していた。北端は、奥壁石の抜き取り痕があり、長さ0.8m、厚さ0.5mである。天井石はほとんどが失われていたが、石室内部に崩れ落ちた石が数個、発見されている。天井石には0.8mほどの大きい石が用いられている。側壁には石を割り加工した石もあり、平坦面を石室内部に向けて揃えている。長方形の石が多く、長さ0.4～0.6m、幅0.3mのものが多い。石室内部は東西1.1m、南北3.7mの規模である。南側では、底面の敷石の一部が確認されている。石は0.1m前後のものが多い。敷石と石室北端のレベル差から、石室は奥壁近辺で、約0.5mほど残存していると思われる。石室主軸はN-14°-Wである。

古墳の東側の削平された法面からは、須恵器が表採された。30号墳から離れていること、また、移動した土に含まれた遺物でない出土状況から、付近に別な遺構があったものと推定され、30号墳に隣接して存在した31号、32号墳に伴う遺物の可能性がある。30号墳東側はかなりの削平を受け、地山が露出している状況であり、31、32号墳は完全に消滅した可能性が高い。

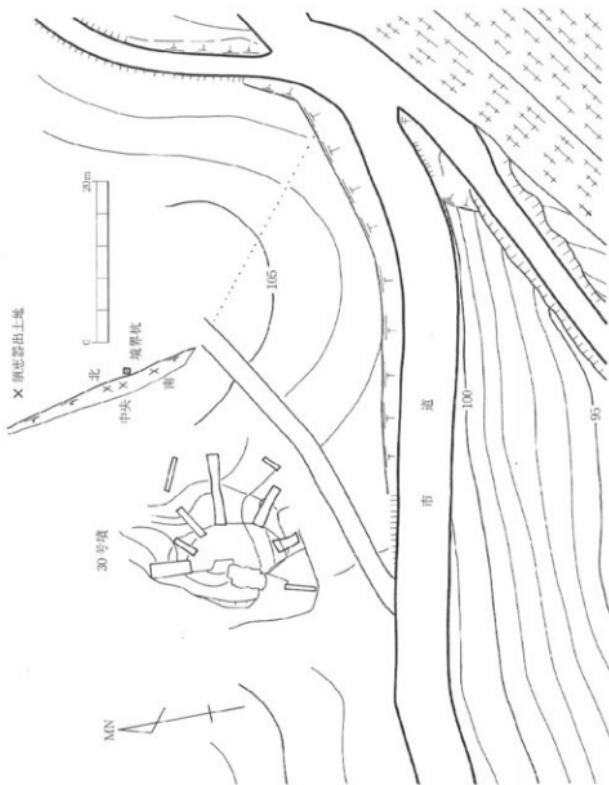
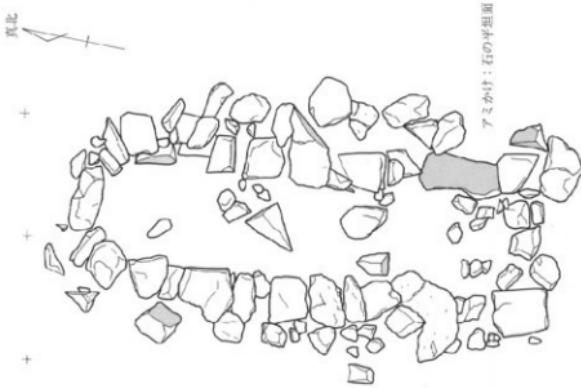


第15図 29号墳 位置図

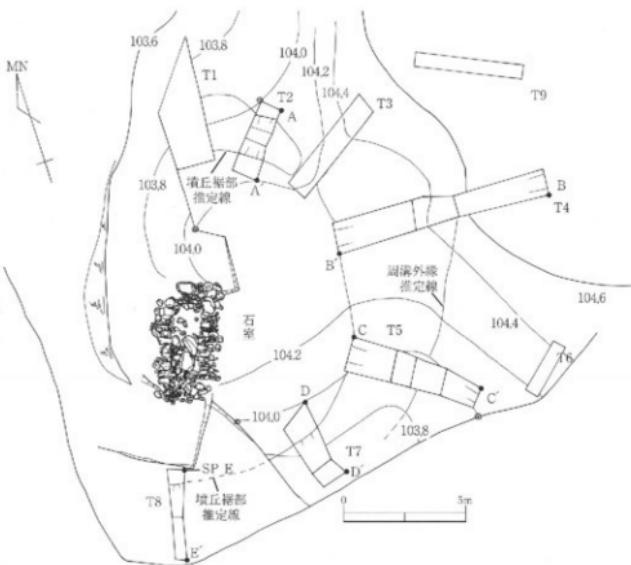


第16図 29号墳 全体図

第17図 29号墳 石室検出状況



第18図 30号墳 位置図



第19図 30号墳 確認調査図

○ 墓壁石の抜取處

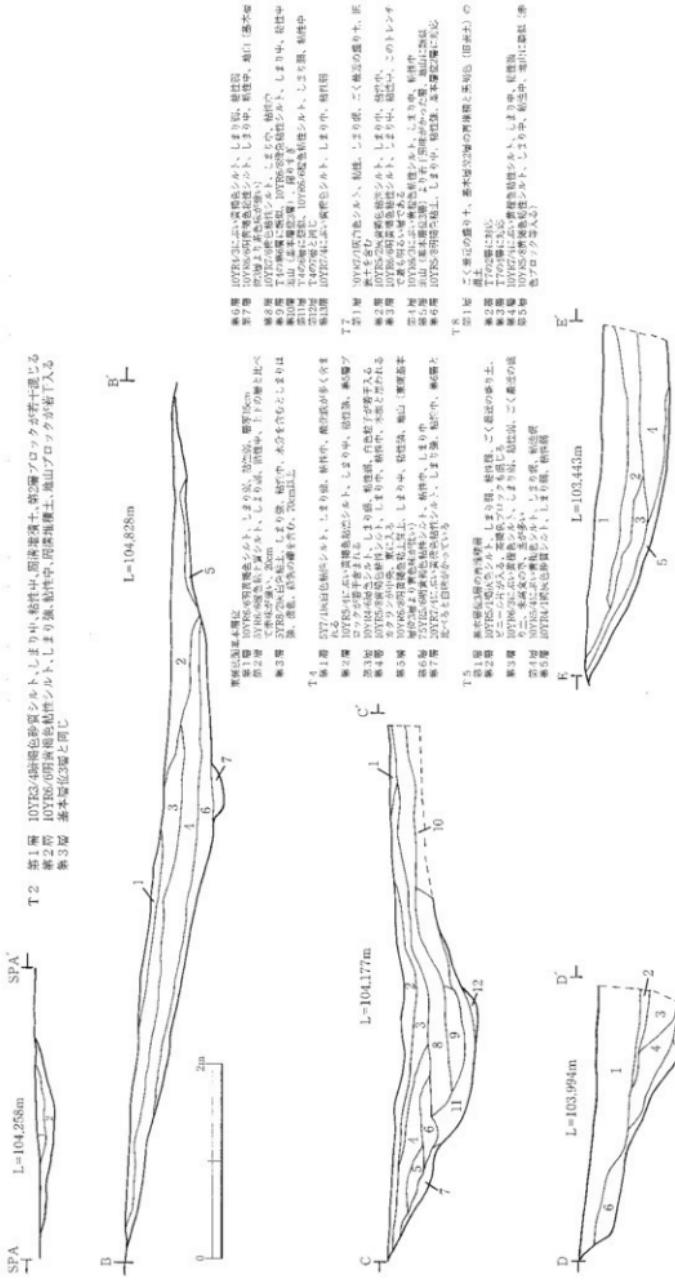


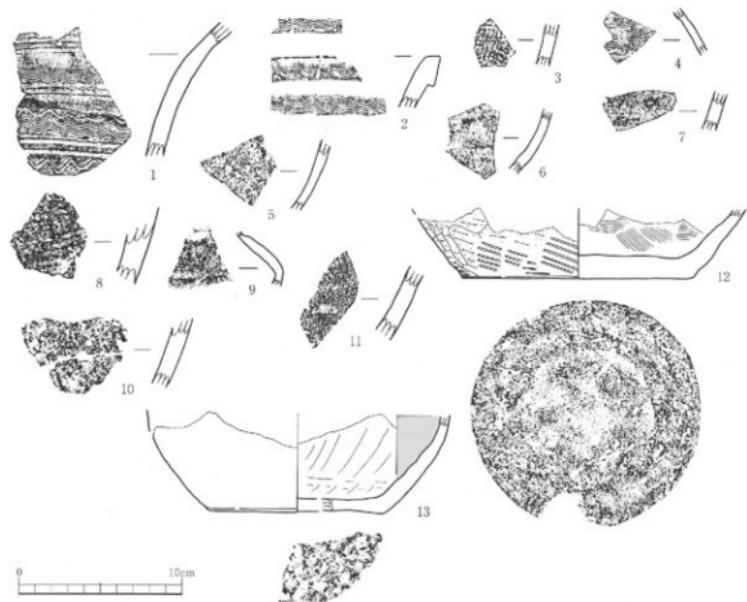
第20図 30号墳 石室確認面



第21図 原位置を留める石

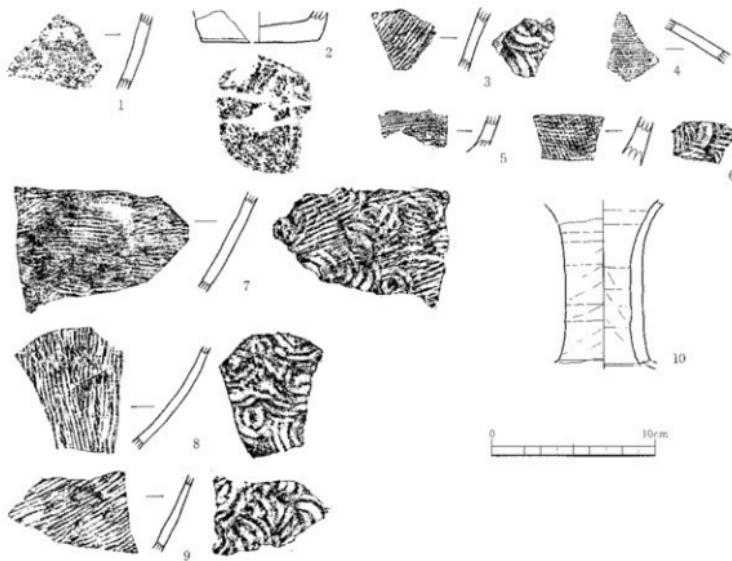
第22図 30号 トレンチセクション図





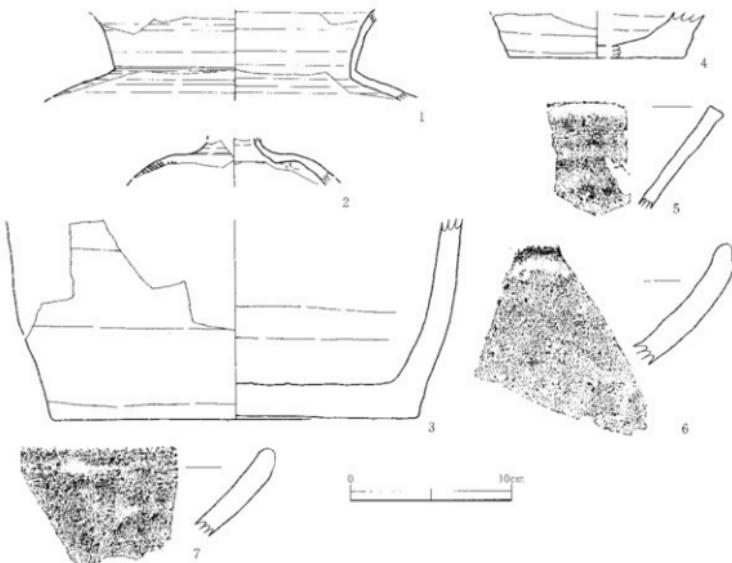
番号	出土位置	種別	外面の特徴	内面の特徴	備考
1	25号墳	須恵器甕	11本、9本一組の波状文が4段	丸いナデ	1, 2は同一個体、写真図版8-2
2	25号墳	須恵器甕	口唇部に波状文、口縁部に8本以上一組の波状文が2段	丸いナデ	1, 2は同一個体、写真図版8-1
3	25号墳	須恵器	格子タタキ目	丁寧なナデ	
4	26号墳周溝堆積土	須恵器	ヨコナデ?	ナデ	写真図版9-6
5	26号墳付近の表土	土師器	摩滅	摩滅	写真図版9-4
6	27号墳丘より表探	須恵器	ヨコ方向のケズリ	ヨコナデ?	写真図版9-7
7	26, 27号墳南側の盛土から表探	須恵器	ヨコナデ	ナデ	
8	26, 27号墳南側の盛土から表探	須恵器	タタキ	ナデ	
9	26, 27号墳南側の盛土から表探	土師器	摩滅、ナデ?	ヨコナデ?	
10	28号墳石室南部の搅乱	土師器	ナデ	摩滅	
11	28号墳南側の盛土から表探	須恵器、生焼け	ケズリ	ヨコナデ	
12	28号墳石室埋土	須恵器	ケズリ、平行タタキ	ナデ	底径14cm、残存高4.3cm 写真図版8-3~5
13	28号墳石室埋土	土師器鉢	摩滅、干割れ	ヘラミガキ、黒色処理	推定底径10.6cm、残存高6.1cm、写真図版7-8

第23図 出土遺物(I)



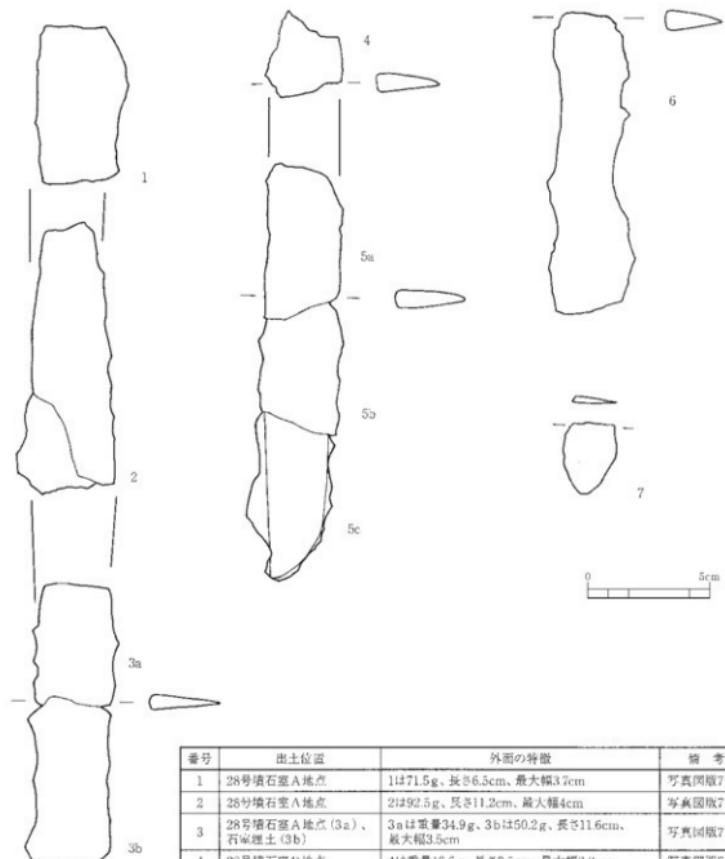
番号	出土位置	種別	外面の特徴	内面の特徴	備考
1	29号墳南縁表土	土器	ナデ	ナデ	写真図版9-5
2	30号墳、T4表土	土器	ナデ、底面に文蓋する沈線文	ナデ	
3	30号墳敷地の東側、(北)地点	須恵器	平行タタキ	青海波文	
4	30号墳表塗	須恵器	ロクロナデ	ロクロナデ	
5	30号墳表塗	須恵器	ロクロナデ	ロクロナデ	
6	30号墳	須恵器	平行タタキ	平行タタキ	
7	30号墳敷地の東側、(中央)地点	須恵器	平行タタキ	青海波文→平行タタキ	写真図版9-1
8	30号墳敷地の東側、(中央)地点	須恵器	平行タタキ	青海波文	写真図版9-2
9	30号墳敷地の東側、(中央)地点	須恵器	平行タタキ	青海波文	写真図版9-3
10	上盤沢古墳、表土	須恵器長頸瓶	ロクロナデとしほり、暗オリーブ5Y4/3	ロクロナデ、袋は風船技法、灰(17.5Y7/1)	湖西産、8世紀初め

第24図 出土遺物(2)



番号	出土位置	種別	外観の特徴	内面の特徴	備考
1	18号墳表土19710630	須恵器裏	ロクロナデ	ロクロナデ	推定底径14.8cm
2	48号墳窓道部19710704	須恵器裏	ロクロナデ、平行タタキ	ロクロナデ、オサエ	推定底径5cm
3	48号墳周溝710623、 18号墳表土+710712、 18号墳石棺内710718	中世陶器裏	ナデ	ナデ	1. 6. 7.14同一側体、写真図版9-8. 9. 推定底径22.4cm、東北・一本杉産、 13~14世紀
4	18号墳7107	中世陶器裏	ナデ	ナデ	推定底径11.4cm、東北・一本杉産、 13~14世紀
5	18号墳表土+7107	中世陶器焼り跡	ナデ	ナデ	東北・一本杉産、13~14世紀

第25図 出土土器



番号	出土位置	外観の特徴	参考
1	28号墳石室A地点	1は71.5g、長さ6.5cm、最大幅3.7cm	写真図版7-1
2	28号墳石室A地点	2は92.5g、長さ11.2cm、最大幅4cm	写真図版7-2
3	28号墳石室A地点(3a)、 石室埋土(3b)	3aは重量34.9g、3bは50.2g、長さ11.6cm、 最大幅3.5cm	写真図版7-3
4	28号墳石室B地点	4は重量18.6g、長さ3.5cm、最大幅3.2cm	写真図版7-4
5	28号墳石室C地点	5cは重量40.9g、5bは37.4g、5aは39.5g、 長さ17.2cm、最大幅3.5cm	写真図版7-5
6	28号墳	6は重量84g、長さ12.4cm、最大幅3.5cm	写真図版7-6
7	石室扉上	7は重量4.5g、長さ2.9cm、最大幅2.1cm、切先?	写真図版7-7

第26図 鉄器（28号墳）

第5節 郡山横穴墓群

この横穴群について、最初の考古学報告は片倉信光の手によって行われている（片倉 1934）。その後、昭和 30 年代に片倉が現地踏査、簡易測量（1964）、昭和 45 年に市教育委員会による測量調査（中橋 1972）が実施された。その後、中橋彰吾が文化財パトロールで現地確認を行っているが（昭和 57 年 11 月 23 日、平成 3 年 12 月 6 日）、近年、教育委員会職員が踏査を行っていなかったため、現地確認を実施した（平成 22 年 2 月 25 日、平成 23 年 11 月 25 日）。

郡山横穴墓群（宮城県遺跡登録番号 02005）は白石市指定史跡としての名称は郡山横穴古墳群である。昭和 48 年 7 月 25 日に指定された。所在地は郡山字穴口山 17-2、郡山字合体沢 14-1 付近である。保存は良好である。

郡山寺入西横穴墓群（同 02003）は郡山字寺入山 2-1 に所在する。横穴墓は吉野氏宅のすぐ裏にある。片倉調査（1964）では 4 つ確認しているが、今回は 2 つしか確認できなかった。住宅背後の崖にあり、石切場に向かう道路際ににおいて開口した 1 基が簡単に発見できた。この横穴墓底面は湧水があった。もう 1 基は落ち葉等では埋没しているが、上端のみ確認したものである。南へ開口している。

郡山寺入東横穴墓群（同 02004）は郡山字穴口山 5 に所在する。横穴墓は、吉野氏宅から石切場に向かい、石切場敷地の南、東端を通っていくと、一段高い石切場にたどり着く。その石切場の上端に接して山の斜面が残っており、そこに横穴墓が存在する。途中、危険を感じながら斜面を登ると、雑木林斜面に 3 基ほど確認でき、南へ開口している。また、石切面の上端近くには、4 基分（西面 2 基、南面 2 基）の横穴墓奥壁部分の残存が確認できた。片倉調査（片倉 1964）では 18 基を確認している。西側の石切場には、平成時代製作の磨崖仏があるが、東日本大震災によって顔面部分が落下した。

郡山金倉横穴墓群（同 02002）は郡山字日向山 8-1 に所在する。金倉横穴墓群は、郡山城跡の脇を通り、大蔵山に登る道から、山道に入ったところにあり、旧石切場の白い崖面の下に横穴墓が存在する。南へ開口している。片倉調査では 10 基を確認しているが、今回は 2 基のみ確認した。これらは片倉調査の 3 号、8 号と思われる。8 基は保存が良好であるが、内部には雜物が混入していた。その他は埋没していると思われる。現在、石切は行っていない。

黒岩横穴墓群（同 02196）は郡山字黒岩 13-2 に所在する。黒岩横穴墓は仙南広域行政事務組合最終処分場敷地の北西隅に位置する。『白石市の文化財』（中橋ほか 1979）では 16 基程の記載があるが、今回は 1 基しか確認できなかった。処分場の直線道路の突き当たり崖面上に横穴があり、東に開口している。大蔵山に向かう道路から、最終処分場フェンス沿いに進むと、付近に到達できる。横穴の保存状態は良好ではなく、横穴の南西隅には亀裂があり、日光が差し込んでいた。横穴間際まで石切を行ったためと推定される。



第27図 郡山横穴墓等 位置図 ($S=1/2,500$)



第28図 金倉横穴墓群 位置図 ($S=1/2,500$)



第29図 黒岩横穴墓群 位置図 ($S=1/2,500$)

第4章 考察－鷹巣古墳群と周辺の埴輪－

鷹巣古墳群の埴輪は、(片倉 1941、志間 1972、片倉・後藤・中橋 1976、今津ほか 1988、藤沢 2002、東影 2008・2009)などにより既に研究・報告されているが、部分的であり全体的な検討はなされていなかった。本章では、鷹巣古墳群を中心に白石市・蔵王町域出土の円筒埴輪について特徴をまとめ、比較を行うものである¹⁾。

第1節 鷹巣古墳群の埴輪

鷹巣古墳群における埴輪が出土した古墳は、瓶ヶ盛古墳（鷹巣 12 号墳）・鷹巣 18 号墳・経塚山古墳（鷹巣 36 号墳）の 3 基である²⁾。

(1)瓶ヶ盛古墳（鷹巣 12 号墳） 墓長 56 m、後円部 2 段築成の前方後円墳で、円筒埴輪および鳥形埴輪（水鳥・鶏）が採集されている（志間 1972）。

円筒埴輪の外面調整は、2 次ヨコハケが主体を占めるが、少量の 1 次タテハケも存在する。特に、底部外面に 2 次ヨコハケを施すなど丁寧な調整がなされている。2 次ヨコハケには、静止痕が確認できないが、揺らぎ回転力が弱く B 種ヨコハケに近い（東影 2009）、回転台を用いない連続ヨコハケといえる。また底部凸帯の剥離面からは、2 条凹線による凸帯設定技法が確認できる³⁾。基部は、粘土帯 2 枚をつなぎあわせ成形している。

(2)鷹巣 18 号墳 箱式石棺を内部主体にもつ直径 22 m の円墳で、1971 年の調査時に円筒埴輪・朝顔形埴輪が出土している（志間 1972）。また戦前にも、底径 25.5 cm、底部高 13 cm を測る円筒埴輪の底部資料が報告されている（片倉 1941）。

円筒埴輪の外面調整は、2 次調整 B 種ヨコハケあるいは連続ヨコハケが施され、底部のみ 1 次タテハケである。静止痕の切り合いから Bb 種ヨコハケに分類できる埴輪片も存在する。口縁部は、内面にもヨコハケが施され、口唇に向かって外傾している。

朝顔形埴輪は、内外面にハケ・ナデ調整が施され、偽口縁部分には端部から内面にかけて刻みを入れている。図 31-6 は、頭部凸帯直上から屈曲部凸帯直下まであり、両凸帯の間隔は推定約 8 cm 程度である。

(3)経塚山古墳（鷹巣 36 号墳） 直径 24 m の円墳で、円筒埴輪・朝顔形埴輪が採集されている（片倉 1941・片倉・後藤・中橋 1976）。

円筒埴輪の外面調整は、体部が B 種ヨコハケであるのに対し、底部は 1 次タテハケのみである。また、基部は粘土帯 1 枚によって成形され、底端部の最大器厚が 4.8 cm と肥大している。底部外面には、連続する斜め方向の圧痕が確認でき、板端圧痕と認められる。板端圧痕は、板押圧による凸帯貼り付け時に器面に残される痕跡である（藤沢 2003）。なお、凸帯剥離面からは、凸帯設定技法の痕跡を確認できなかった。

朝顔形埴輪は、屈曲部から口縁部にかけて、内外面にハケ調整が施されている。

第2節 亀田1号墳・志在家遺跡の埴輪

白石市内には、鷹巣古墳群以外に亀田1号墳・志在家遺跡より埴輪が確認されている。

(1)亀田1号墳採集埴輪の経緯

今回報告される亀田1号墳の2点の円筒埴輪片は、福島大学行政政策学類考古学研究室に保管される資料で、考古学同人組織の土筆舎による採集品である。本資料は、土筆舎のご厚意により先年菊地に寄託され、勤務する福島大学で研究資料として保管していたものであるが、このたび白石市教育委員会および大栗行貴氏の要請により参考資料に供することとした。掲載をお認めいただいた土筆舎には心よりお礼を申し上げたい。

土筆舎のメモによれば、本資料は1986年に亀田古墳群の主墳である帆立貝塚（亀田1号墳）の後円部中間テラス付近で採集されたものである。『宮城県史』には、本古墳から埴輪が採集されることが記されており（志間1981）、一部関係者には埴輪をもつ古墳と知られていたが、これまで埴輪の実測図や拓本が刊行物等に掲載されたことはなかったものとみられる。本資料の公表が白石市および周辺地域の歴史復元や考古学研究の進展にわずかながらでも寄与するものとなれば幸いである。（菊地芳朗）

(2)亀田1号墳の埴輪

亀田古墳群は、瓶ヶ盛古墳（鷹巣12号墳）から南へ約3.4kmの白石市斎川字弥平田に所在する丘陵上に立地し、帆立貝塚1基と円墳4基で構成する。埴輪が出土しているのは、墳長44mの帆立貝塚である亀田1号墳のみである。外面調整は2次調整B種ヨコハケ、内面調整はユビナデが施されている。

(3)志在家遺跡

瓶ヶ盛古墳（鷹巣12号墳）から南へ約2kmの白石市大鷹沢三沢字前輪に所在し、2009年の調査時に表土から埴輪片1片が出土している（日下2010）。

埴輪は、外面調整1次タテハケ、内面調整ユビナデが施されている。上端部には、ヨコナデと若干の立ち上がりが確認できることから、凸帯部に続く箇所と考えられる。

埴輪に伴う遺構は発見されていないが、周辺に古墳あるいは埴輪窯の存在も想定される。

第3節 蔵王町の埴輪

蔵王町では、宗膳堂古墳と天王古墳の2基から埴輪が採集されている⁴⁾。

(1)宗膳堂古墳

蔵王町大字塙沢字戸ノ内脇に所在し、丘陵麓に立地する。直径35mの円墳で、円筒埴輪と朝顔形埴輪が採集されている（片倉・後藤・中橋1976・中橋1987）。

円筒埴輪は、外面調整1次タテハケで、赤彩が徹布された資料も含む。また、形態全体的に外傾する形態をとり、口唇部ではやや強いヨコナデにより外反する。また、口唇部の内面調整には、ヨコハケの後にタテ方向のユビナデ調整が施されている。胎土に海綿状骨針を含んでいる特徴をもつ。なお、凸帯剥離面からは、凸帯設定技法の痕跡を確認できなかった。

朝顔形埴輪は、頸部片のみだが1点確認した。

(2)天王古墳

蔵王町大字塙沢字天王に所在し、丘陵斜面に立地する。現存する直径23mの円墳のはか3基以上の同規模円墳（削平）が確認され古墳群を構成している（中橋1987）。埴輪は、現存する古墳（天王古墳）から採集されたものと考えられる。

図示できたのは、埴輪片1点のみである。外面調整は、1次タテハケで胎土に海綿状骨針を含むなど、宗膳堂古墳の埴輪と類似している。このことから、内面調整のヨコハケの後にタテ方向のユビナデが施される破片は、円筒埴輪の口唇部に近い口縁部資料であると考えられる。

第4節　まとめ

鷹巣古墳群と周辺の古墳の埴輪の特徴を述べた。以下で比較を行いたい。

鷹巣古墳群および亀田1号墳の埴輪は、2次ヨコハケの外面調整が施されている。瓶ヶ盛古墳の埴輪は、底部外面にまで2次調整を施し、古い様相を示す。一方、経塚山古墳は、底径の縮小や底部調整が粗雑であることから相対的に新しい。鷹巣古墳群における埴輪生産が同一工人によるものと仮定すれば、埴輪生産を瓶ヶ盛古墳→鷹巣18号墳→経塚山古墳の順と考えられる。なお、亀田1号墳も3古墳と並行し、いずれも古墳時代中期中葉の時期に該当する。また、2条の凹線による凸帯設定技法・板押圧による凸帯貼り付け技法などの製作技法についても確認した。このような技法は、阿武隈川流域の鱗沼古墳（宮城県角田市）・国見八幡塚古墳（福島県国見町）・谷地古墳（福島県大玉村）・金山古墳（同）・大善寺古墳群（福島県郡山市）などの阿武隈川流域の埴輪に類似する。

蔵王町の埴輪は、外面調整1次タテハケや口縁部内面の調整、胎土に海綿状骨針を含むことが共通する。さらに、宗膳堂古墳の埴輪は、口唇部で外反する形態や赤彩の特徴をもつ。これらは、仙台平野における「富沢窯跡系列」（藤沢1987）の埴輪と類似する。また、宗膳堂古墳の埴輪を富沢窯跡系列もしくは、それに類似する埴輪とした（藤沢2002）の指摘を補強するものである。埴輪の年代は、同系列の維続期間である古墳時代中期中葉から後葉と考えられる。今後、外表施設も含めた仙台平野の古墳との比較が必要である。

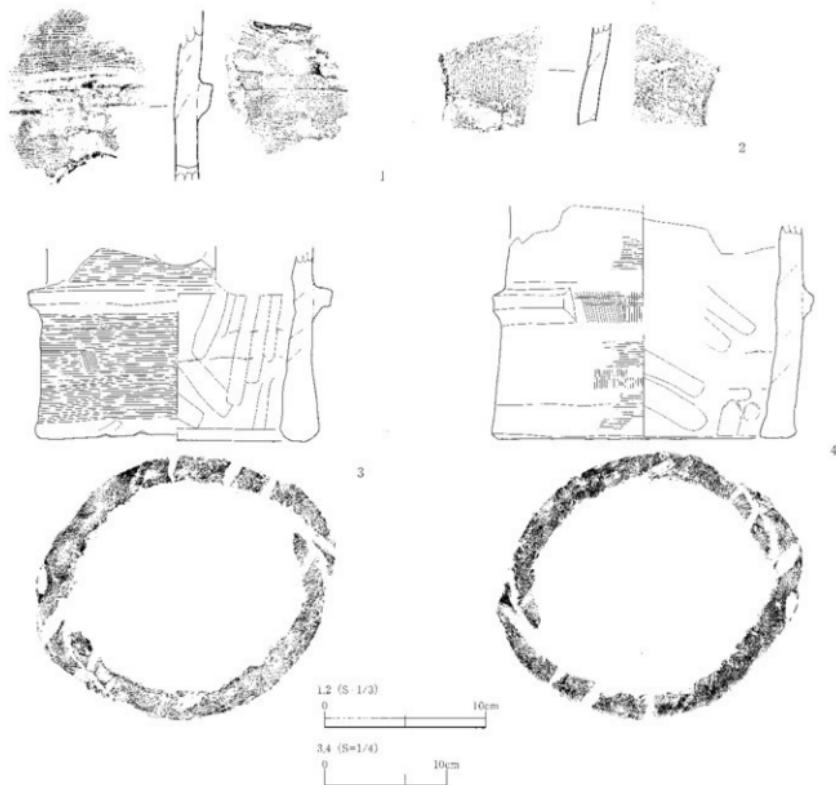
白石市・蔵王町域は近接する地域であるが、埴輪においては技法・胎土の多くで相違点を見出すことができ、それぞれ阿武隈川流域と仙台平野の埴輪に類似することが明らかになった。このことから、2系統の埴輪生産が同地域に展開されたと考えられる。

① 資料は、亀田1号墳採集埴輪を福島大学考古学研究室、それ以外の埴輪を白石市教育委員会が保管している。

② 鷹巣13号墳の調査時にも埴輪が出土しているが、出土状況から13号墳に伴うものではない（宮城県教育委員会1967）。また、鷹巣古墳群に近接する蛭賀屋敷遺跡では、埴輪片が1点出土し（日下・櫻井2009）、古墳群に由来すると考えられる。

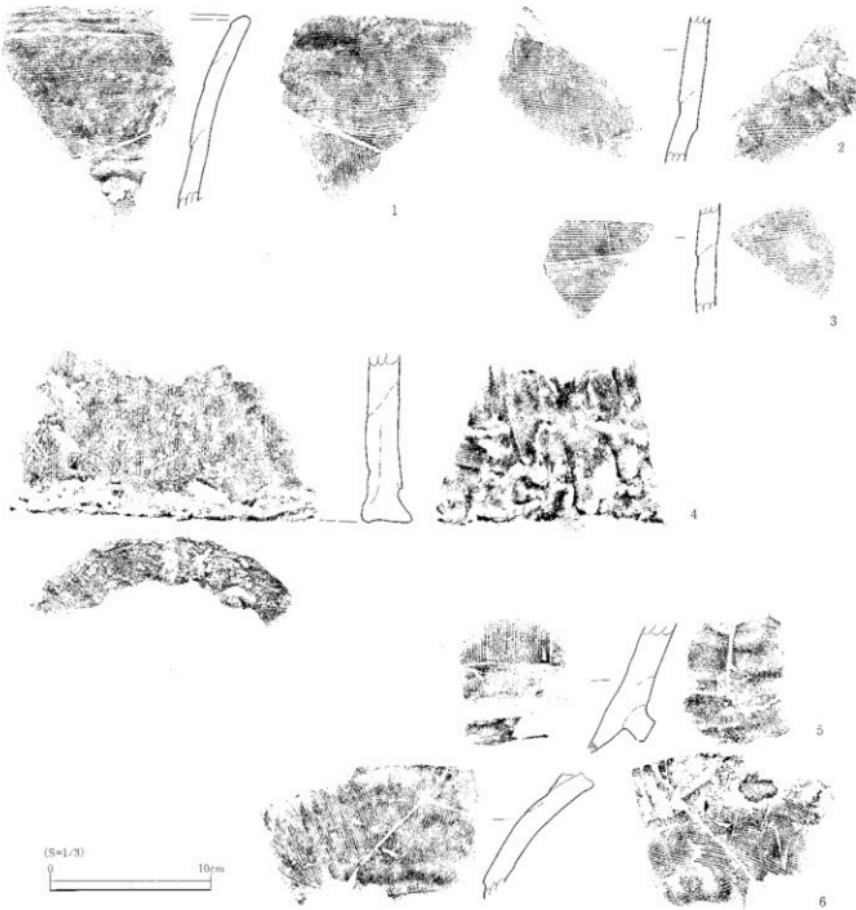
③ 辻川哲朗氏御教示

④ 都遺跡でも埴輪が出土するとされる（白石市史編さん委員会1976）が、確認できない。



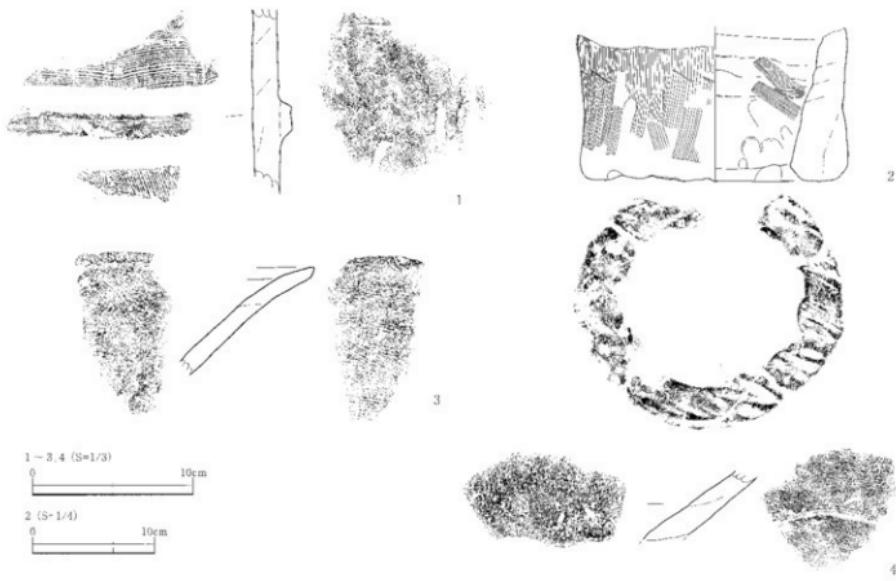
図版番号	器種	部位	特徴	備考
30-1	円筒	体部	外面：2次ヨコハケ（連続）、内面：ヨコハケ、円形透孔	前方部北辺採集 写真図版10-1, 2
30-2	円筒	体部	外面：1次タテハケ、内面：ヨコハケ、透孔（円か）	後円部北辺採集 写真図版10-3
30-3	円筒	底部	外面：2次ヨコハケ（浅掛）、内面：ヨコハケ、円形透孔、底面：棒状压痕、2帯造り或形、計測値：底径22.8cm・底高12.3cm	「南東隅」注記 市史別巻p.169 No.2 写真図版10-4
30-4	円筒	底部	外面調整：2次ヨコハケ（連続）、内面調整：ヨコハケ、底面：棒状压痕、凸帯列壓痕：凹線2条、基部：2帯造り、計測値：底径25.0cm・底高12.8cm	「南東隅」注記 市史別巻p.169 No.1 写真図版10-6

第30図 瓶ヶ盛古墳採集埴輪



団体番号	器種	部位	特徴	備考
31-1	円筒	口縁部	外面: 2次ヨコハケ(迷線)、内面: ヨコハケ、口脛部: ヨコナデ	表土出土。写真図版10-5
31-2	円筒	体部	外面: 2次ヨコハケ(B種)、内面: ヨコハケ	表土出土。写真図版11-3
31-3	円筒	体部	外面: 2次ヨコハケ(B種)、内面: ヨコハケ	表土出土。写真図版11-2
31-4	円筒	底部	外面: 1次タテハケ、压痕、内面: ユビナデ・ハケ	表土出土。写真図版11-4
---	円筒	体部	外面: 2次ヨコハケ(迷線)、内面: ヨコハケ、透孔(円か)	表土出土。写真図版12-5
31-5	朝顔形	屈曲部 ~口縁部	外面: 1次タテハケ、内面: ヨコナデ	箱式石棺石列間出土。写真図版12-1, 2
31-6	朝顔形	屈曲部	外面: タテハケ、内面: ヨコハケ、偽口縁部: ヨコナデ・割み	表土出土。写真図版12-3, 4
---	朝顔形	屈曲部	外面: タテハケ、内面: ヨコハケ	表土出土。写真図版11-1
---	朝顔形	口縁部	外面: タテハケ、内面: ヨコハケ、口脛部: ヨコナデ	表土出土。写真図版11-5, 6

第31図 鹿塚18号墳出土埴輪



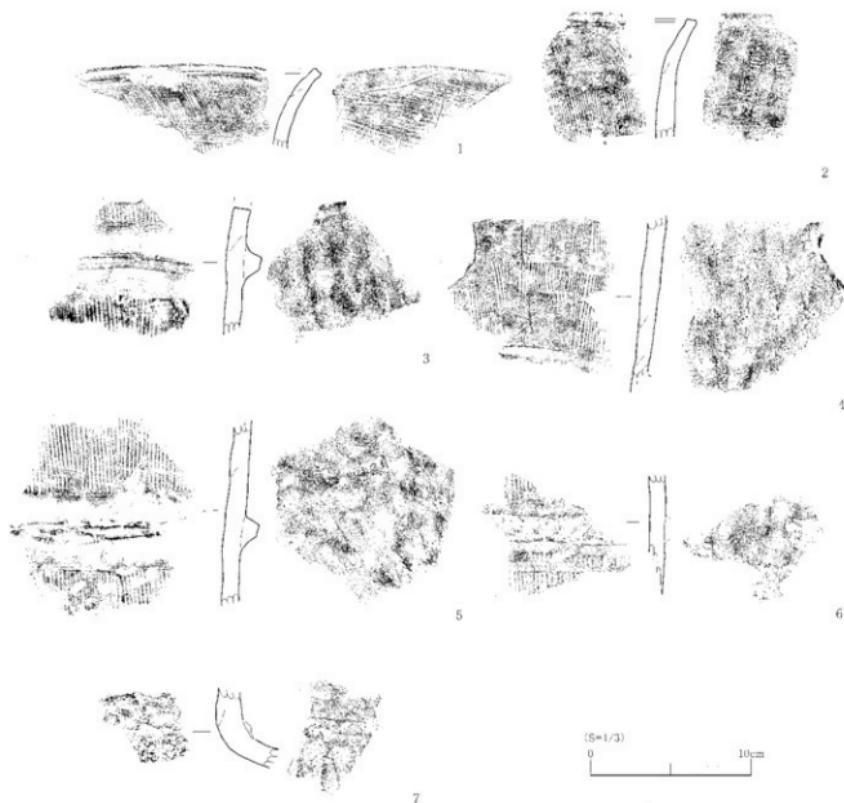
第32図 経塚山古墳（巣鴨36号墳）採集埴輪



第33図 龜田1号墳採集埴輪



第34図 志在家遺跡出土埴輪



第35図 宗膳堂古墳采集埴輪



第36図 天王古墳采集埴輪

国版番号	器種	部位	特徴	備考
35-1	円筒	口縁部	外面：1次タテハケ→ヨコナデ、内面：ヨコハケ、胎土：海綿状骨針含む	写真図版14-2
35-2	円筒	口縁部	外面：1次タテハケ→ヨコナデ、内面：ヨコハケ→タテナデ、口縁部：ヨコナデ、胎土：海綿状骨針含む	写真図版14-4
35-3	円筒	体部	外面：1次タテハケ、内面：タテナデ、円形透孔、胎土：海綿状骨針含む	市史別巻p.519 No.6 写真図版14-3
35-4	円筒	体部	外面：1次タテハケ→赤彩、内面：タテナデ、円形透化	写真図版14-6
35-5	円筒	体部	外面：1次タテハケ、内面：タテナデ	市史別巻p.519 No.5 写真図版14-5
35-6	円筒	体部	外面：1次タテハケ、内面：タテナデ、胎土：海綿状骨針含む	写真図版15-4
35-7	軽輪形	頭部	外面：タテハケ、内面：ナデ	写真図版15-1

第5章 ま と め

- 1 鷺巣古墳群は標高 100m の丘陵上に立地する古墳群である。26～30号墳の年代は7世紀代と考えられる。
- 2 26、27号墳は石室、墳丘が確認された。横穴式石室の円墳と考えられ、それぞれ、直径 10 m、12～13 m と推定され、周溝を伴っている。
- 3 28号墳は以前の踏査で直径 7 m の円墳と報告されていたものである。横穴式石室底面が確認され、無袖式と考えられた。鉄刀、須恵器が出土した。
- 4 29号墳は直径約 9.7m の円墳で横穴式石室が確認された。墳丘は 1.5m ほど確認された。土師器 1 点が出土している。
- 5 30号墳は直径 14 m ほどの円墳であり、横穴式石室を伴っている。土師器等が出土した。隣接していた 31 及び 32 号墳は破壊されたと推定される。
- 6 瓶ヶ崎古墳、鷺巣 18 号墳、経塚山墳、亀田 1 号墳の白石盆地の埴輪、宗勝堂古墳、天王古墳の円田盆地の埴輪の比較から、地域差、時期差が指摘され、前者の年代は古墳時代中期中葉、後者は中期中葉から後葉と推定される。
- 7 郡山横穴墓ほかは、現在、各種開発事業の危機にさらされていないものの、以前とは、大きく異なる状態となっている。

引用参考文献

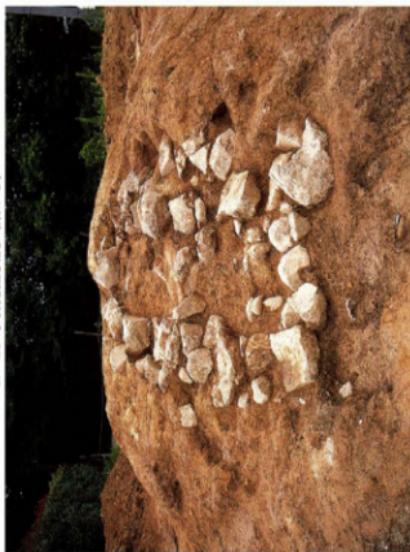
- 今津範生ほか 1988 「企画展東国のはにわ」 福島県立博物館
- 遠藤智、清野俊太朗 1984 梅田遺跡調査報告書 白石市文化財調査報告書第22集
- 片倉信光 1931 「鷹ノ巣古墳見聞記」『上代文化』4・5合併号 pp.64-69
- 片倉信光 1934 「郡山横穴古墳群に就て」『武藏野』21-2 pp.21-24
- 片倉信光 1941 鷹ノ巣古墳群調査報告 白石郷土研究会〔(片倉・後藤・中橋 1976) pp.39-50に再録〕
- 片倉信光、佐藤庄古、高子商衛、遠藤忠雄 1963 埼蔵文化財包蔵池調査金カード 鷹ノ巣古墳群
- 片倉信光、遠藤忠雄、高子直衛、佐藤庄古 1964 鷹ノ巣古墳群調査概報 白石市文化財調査報告書第2号
- 片倉信光 1964 郡山横穴古墳群調査概報
- 片倉信光、後藤勝彦、中橋彰吾 1976 『白石市史』別巻 考古資料編
- 片倉信光 2009 郡山横穴古墳群調査概報 白石市文化財調査報告書第36集
- 日下和寿ほか 1998 片倉小十郎の城 白石城跡発掘調査報告書 白石市文化財調査報告書第26集
- 日下和寿、佐藤敏幸 2008 市内遺跡発掘調査報告書Ⅲ 白石市文化財調査報告書第31集
- 日下和寿、櫻井和人 2009 市内遺跡発掘調査報告書4 白石市文化財調査報告書第33集
- 日下和寿、櫻井和人ほか 2009 和尚堂遺跡はか发掘調査報告書 白石市文化財調査報告書第37集
- 日下和寿ほか 2009 白石条里制跡推定地はか发掘調査報告書 白石市文化財調査報告書第35集
- 日下和寿2010 第2章4「志在家遺跡」市内遺跡発掘調査報告書5 白石市文化財調査報告書第38集 pp.20-27
- 佐藤敏幸 2011 「白石市内出土の搬入須恵器について」中ノ在家遺跡 白石市文化財調査報告書第39集 pp.4-8
- 志間泰治 1972 鷹ノ巣古墳群発掘調査概報 白石市文化財調査報告書第12号
- 志間泰治 1981 「亀田古墳群」『宮城県史』34(資料篇11) pp.426
- 中橋彰吾 1972 白石市郡山横穴古墳群 白石市文化財調査報告書第11号
- 中橋彰吾 1987 「宗福堂遺跡」「天王遺跡」「藏王町史」資料編1 pp.187-191, 192-197
- 東影整 2008 「東北地方における埴輪牛車の系譜」『古代文化』第60巻第1号 pp.117-126
- 東影整 2009 「東北地方における須恵器系埴輪の展開」『宮城考古学』第11号 pp.127-139
- 廣谷和也 2008 「東北南部における古墳出土鉄鎌の変遷」『古文化談叢』第60集 pp.107-128
- 藤沢敦 1987 第Ⅷ章「考察」『大野田古墳群春日社古墳・鳥居塚古墳発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第108集 pp.54-90
- 藤沢敦 2001 「阿武隈川流域の前方後円墳(その2)」『宮城考古学』第3号 pp.31-52
- 藤沢敦 2002 「東北地方の円筒埴輪・窑窯焼成埴輪の普及と生産」『埴輪研究会誌』第6号 pp.17-42
- 藤沢敦 2003 「東北地方の円筒埴輪・技法・系譜・伝播-」『埴輪・円筒埴輪製作技法の観察・認識・分析-』第52回埋蔵文化財研究会要旨 pp.315-330
- 藤沢敦 2004 「埴輪の地域性と時代性 東への波及」『考古資料大観』第4巻 pp.220-230
- 宮城県教育委員会 1967 廉の巣古墳群 墓蔵文化財緊急発掘調査報告書 宮城県文化財調査報告書第12集

報告書抄録

ふりがな	たかのすこあんぐん																
書名	鷹巣古墳群																
副書名																	
卷次																	
シリーズ名	白石市文化財調査報告書																
シリーズ番号	第42集																
編著者名	日下和寿、大栗行貢、奥地芳郎																
編集機関	白石市教育委員会																
所在地	〒989-0206 宮城県白石市寺屋敷前25番地6 TEL:0224(22)1343																
発行年月日	西暦2012年3月16日																
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	発掘調査面積 m ²	調査原因 認									
		市町村	遺跡番号														
鷹巣26、27号墳	白石市鷹巣字堂ノ入山2-3	04206	02005	38°00'03"	140°38'46"	20040126~ 20040203	78.00	範囲内容 認									
鷹巣28号墳	白石市鷹巣字堂ノ入山2-14	04206	02005	38°00'35"	140°38'47"	20050719~ 20050822	23.00	範囲内容 認									
鷹巣29号墳	白石市鷹巣字堂ノ入山2-6	04206	02005	38°00'03"	140°38'47"	20040705~ 20040714	97.00	範囲内容 認									
鷹巣30号墳	白石市郡山字虎子沢山2-5、2-26	04206	02005	38°00'04"	140°38'52"	20050809~ 20051205	483.00	範囲内容 認									
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項											
鷹巣26、27号墳	古墳	古墳時代	石室、周溝	土師器、須恵器		両古墳とも周溝が確認された。											
鷹巣28号墳	古墳	古墳時代	石室	須恵器、鉄器		石室底面付近が確認された。											
鷹巣29号墳	古墳	古墳時代	石室、壙丘	土師器		石室内部は残存していると考えられる。											
鷹巣30号墳	古墳	古墳時代	石室、壙丘、周溝	土師器		周溝が確認された。石室内部は残存していると考えられる。											
要約	鷹巣26、27、30号墳は周溝を持つ古墳である。																
	鷹巣28号墳は石室底面しか残存していない。鷹巣26、27、29、30号墳は、石室の一部は残っていると考えられる。年代は7世紀代と考えられる。																
各古墳から土師器、須恵器、鉄器等が発見された。																	
鷹巣12号墳(熊ヶ塚古墳)、鷹巣18号墳、経塚古墳、龜田1号墳の円筒埴輪と、円田盆地の宗藤堂古墳、天王古墳の円筒埴輪には、地域差、時期差が認められ、前者は古墳時代中期中葉、後者は中期中葉から後葉と推定される。																	



3. 29号墳発掘状況(東から)



4. 29号墳石室確認状況(南から)



1. 28号墳石室発掘状況(南から)



2. 30号墳石室確認状況(南から)

写真図版1 28、29、30号墳



1. 26、27号墳近景（西から）



2. 26号墳石室（南から）



3. 26号墳石室中央（西から）



4. 同T2断面西側（南から）



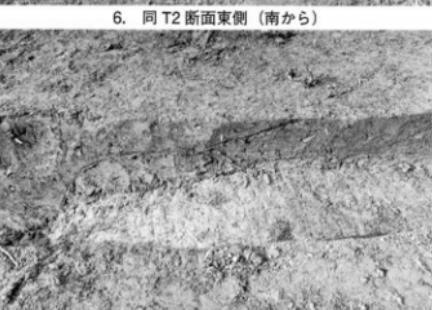
5. 同T2断面中央（南から）



6. 同T2断面東側（南から）



7. 同T1断面西側（南から）



8. 同T1断面東側（南から）

写真図版2 26号墳



1. 27号墳近景（西から）



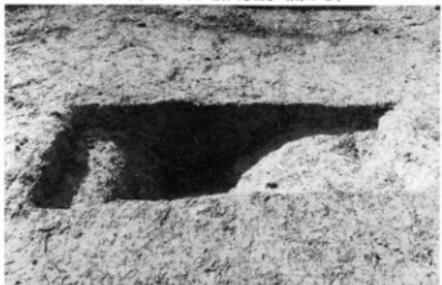
2. 同（南から）



3. 同T1 SD検出状況（南から）



4. 同T2 SD発掘状況（西から）



5. 同T1 SD断面（東から）



6. 同T2 SD断面東側（南から）



7. 同T2 SD断面西側（南から）



8. 埋め戻し状況（東から）

写真図版3 27号墳



1. 28号墳調査前状況（南から）



2. 同 深掘りトレンチ断面（南から）



3. 同 鉄器出土状況（東から）



4. 鷹巣3号墳石棺（白石第一小学校内、平成11年8月）



5. 銚子ヶ盛古墳の石室石材を用いた石橋箇所



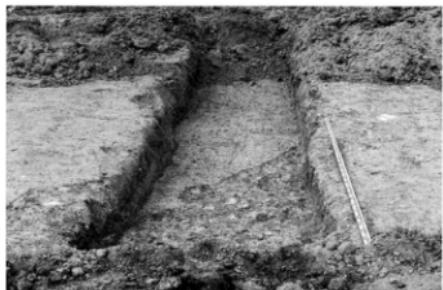
6. 鷹巣観音堂の絵馬



7. 絵馬の細部（1）



8. 絵馬の細部（2）



1. 29号墳北側トレンチ全景（南から）



2. 30号墳調査地風景（北から）



3. 30号墳石室（北から）



4. 同 石室南側細部（南から）



5. 同 石室東側細部（西から）



6. 同 石室東側細部（西から）



7. 同T1東壁（西から）

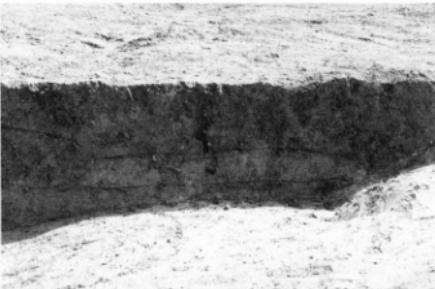


8. 同T2東壁（西から）

写真図版5 29、30号墳



1. 30号墳 T4 全景（西から）



2. T4 南壁（北から）



3. T5 北壁（南西から）



4. T7 東壁（西から）



5. T8 東壁（西から）



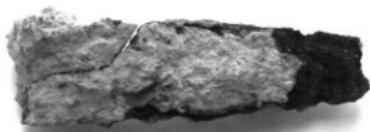
6. 30号墳東側の法面（西から）



7. 法面における須恵器発見状況（西から）



8. 調査風景（北から）



2



1



3b



3a



5c



5b



5a



4



6



7

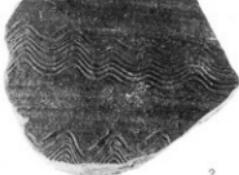


8

写真図版7 鷹巣28号墳出土鉄器と土器



1



2



3(外面)



4(底面)



5(内面)

写真図版 8 出土遺物 (1)



写真図版 9 出土遺物 (2)



1



2



3



4



5



6

写真図版 10 塗輪 (1)



1



2



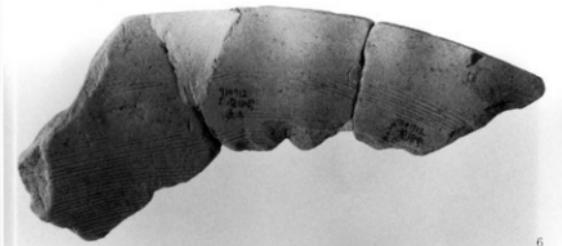
3



4



5



6

写真図版 11 塗輪 (2)



1



2



3



4



5



6

写真図版 12 塤輪 (3)



1



2



3



4



5

写真図版 13 塗輪 (4)



1



2



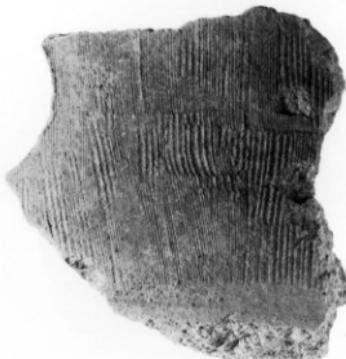
3



4

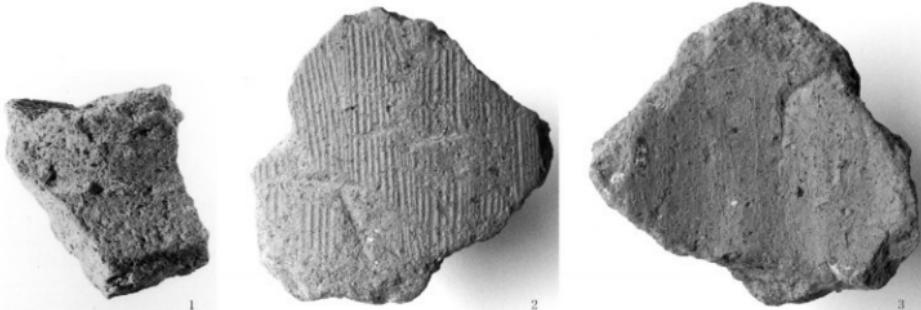


5



6

写真図版 14 塗輪 (5)



写真図版 15 塙輪 (6) 横穴墓

白石市文化財調査報告書 第42集

鷹巣古墳群

平成24年3月14日印刷

平成24年3月16日発行

編集・発行 白石市教育委員会

〒983-0206 宮城県白石市字寺原敷前25番地6

電話:0224(22)1343

印 刷 株式会社佐々木印刷所

〒983-0035 宮城県仙台市宮城野区日の出町2丁目2番16号

電話:022(236)1281

